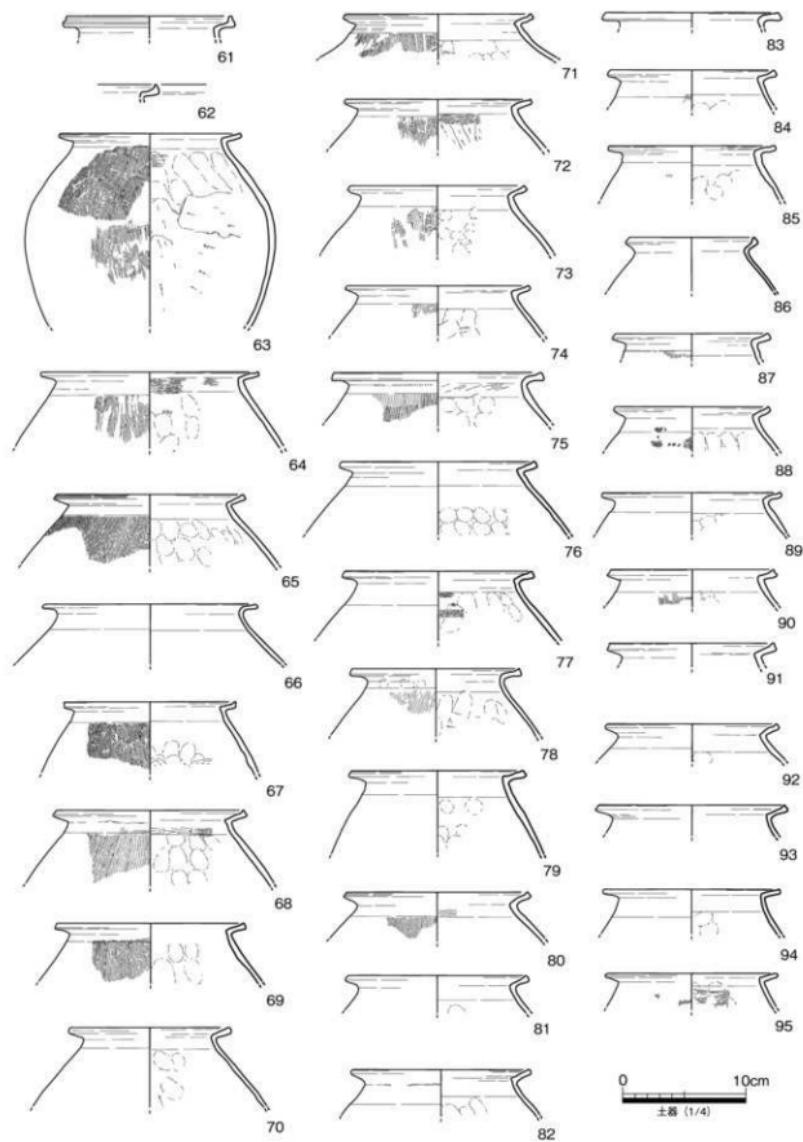
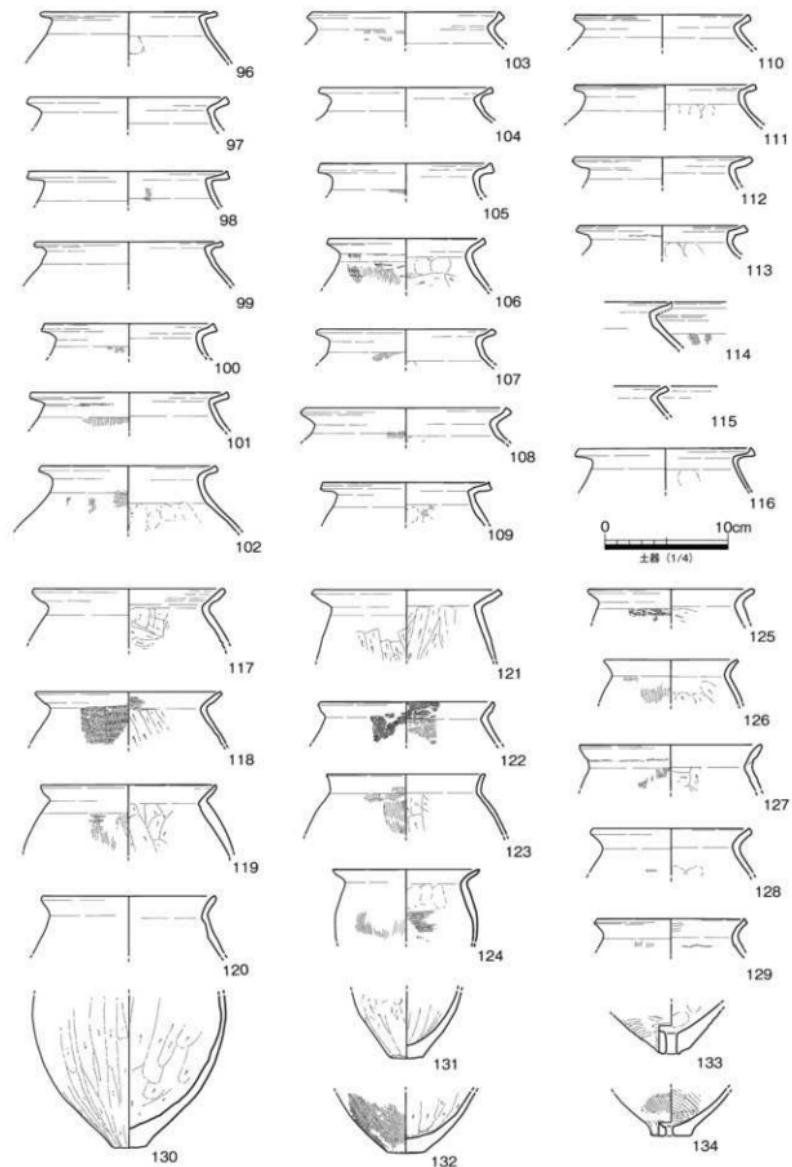


第28図 SD05b層 出土遺物3



第29図 SD05b層 出土遺物4



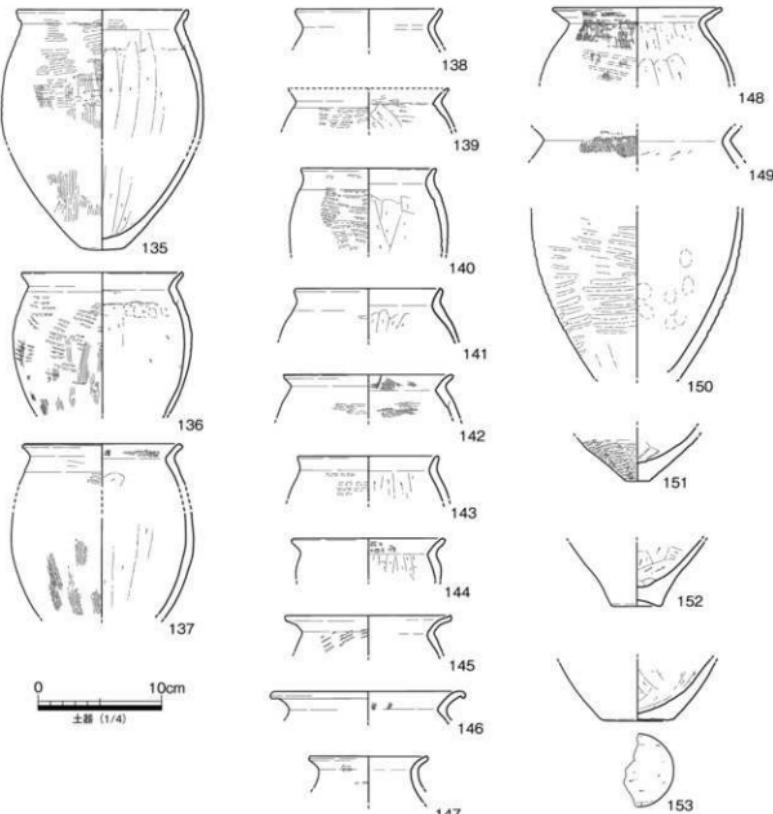
第30図 SD05b層 出土遺物5

供献土器の時期 1・2・5～19は弥生時代中期末(中期Ⅲ-3)に位置づけられる。3・4は高松平野に例がなく時期の特定が難しいが、中期後葉(中期Ⅲ)のなかで考えたい。

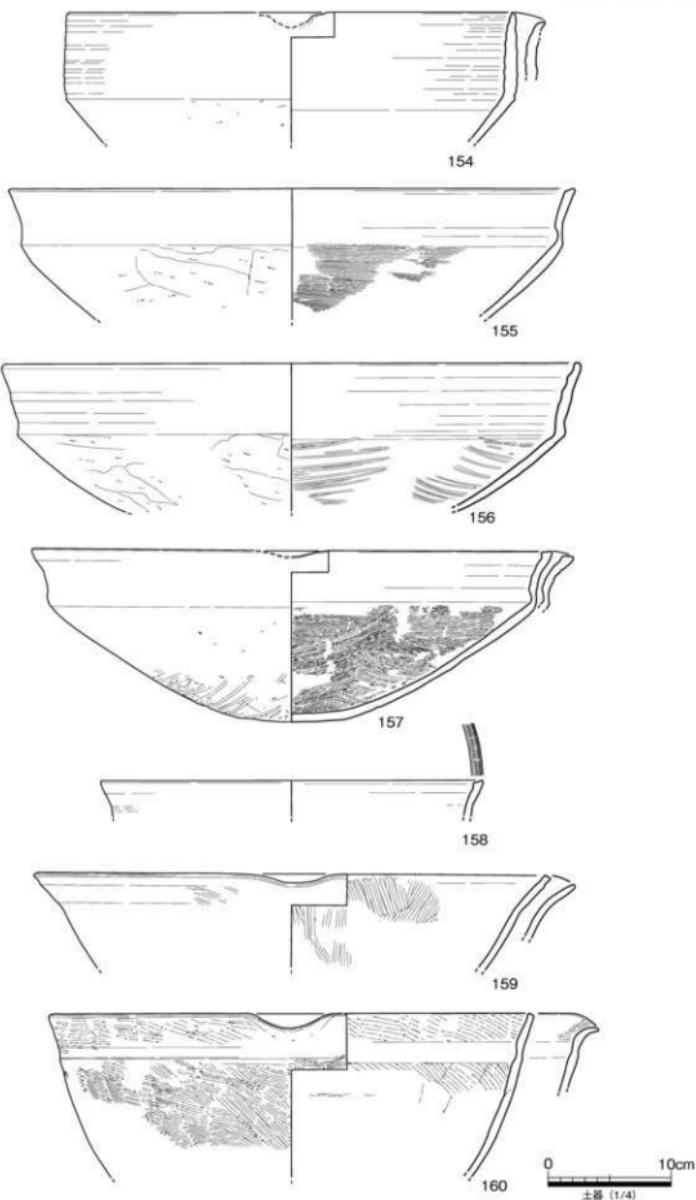
6 区画溝出土遺物

c層出土遺物 c層から出土した遺物のうち、供献土器と判断できなかったものである。区画溝の加工時形成層に伴うため、基本的には区画溝構築時のものであるが、本来は供献土器であった可能性を含む土器もある。20～23はSD05からの出土である。20は弥生時代中期末(中期Ⅲ-3)の壺口縁部で、黒雲母を含む橙色の胎土は、供献土器によく似る。21は弥生土器壺、22は弥生土器高杯、23はサヌカイト製石鎌である。24・25はSD01から出土した弥生土器である。SD03から出土した26はサヌカイト製石鎌で、周縁には細かな調整が認められる。弥生土器27～37はSD07に伴う。

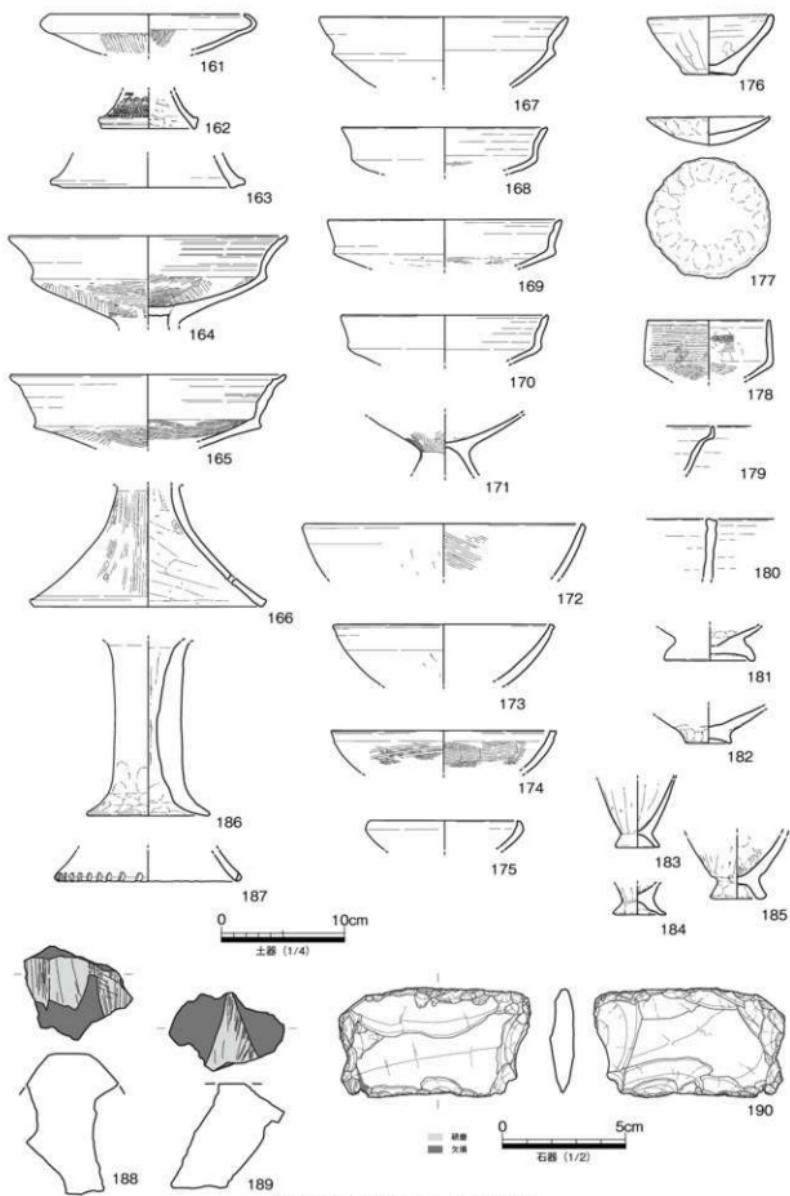
c層の時期 24・29・30・32・33・34は弥生時代中期後葉で、供献土器よりもやや古い時期(中



第31図 SD05b層 出土遺物 6



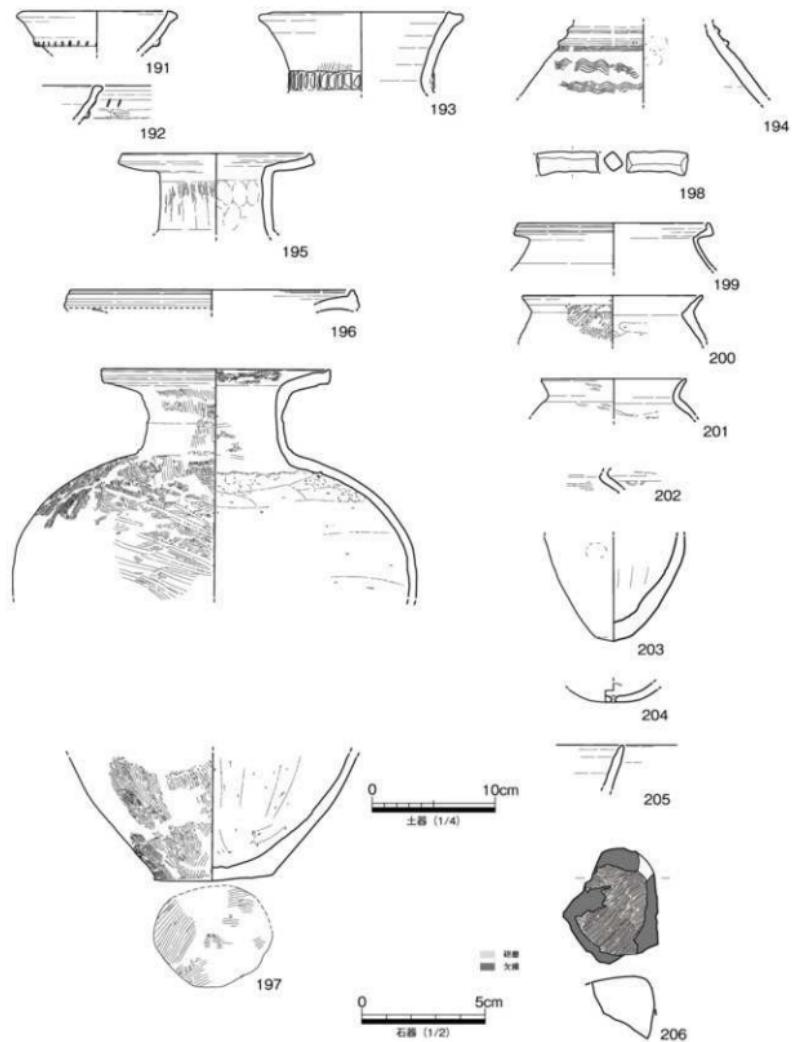
第32図 SD05b層 出土遺物7



第33図 SD05b層 出土遺物8

期III-2)を示す。残存状況の良好な供献土器を区画墓の最終形態に伴うとすれば、これらの土器はそれ以前、すなわち構築当初の区画墓に伴う可能性もある。

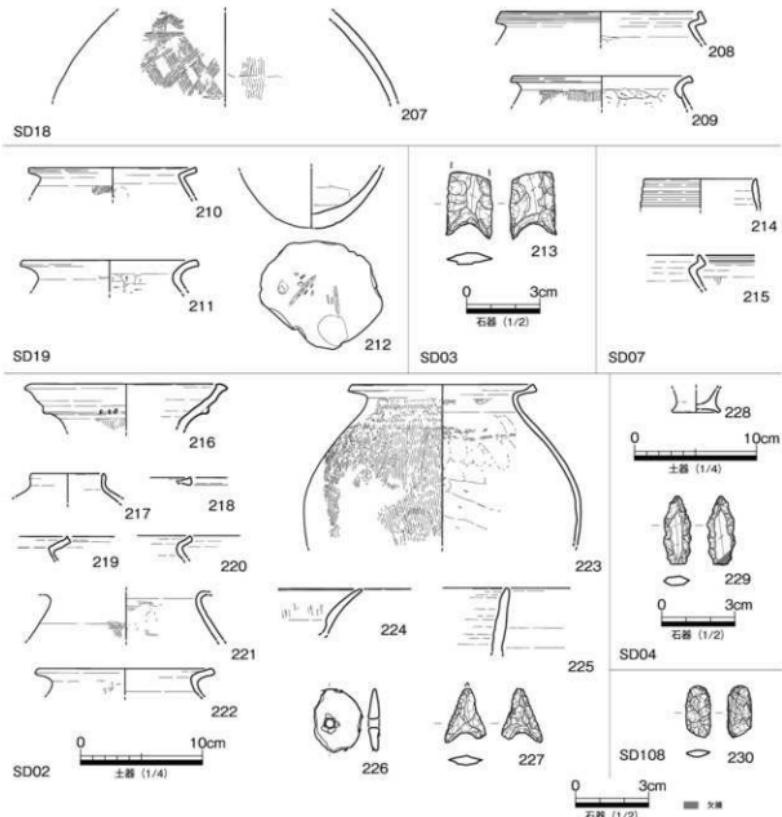
b層出土遺物 区画溝の堆積土の大半をb層として調査した。38～190はSD05からの出土である。



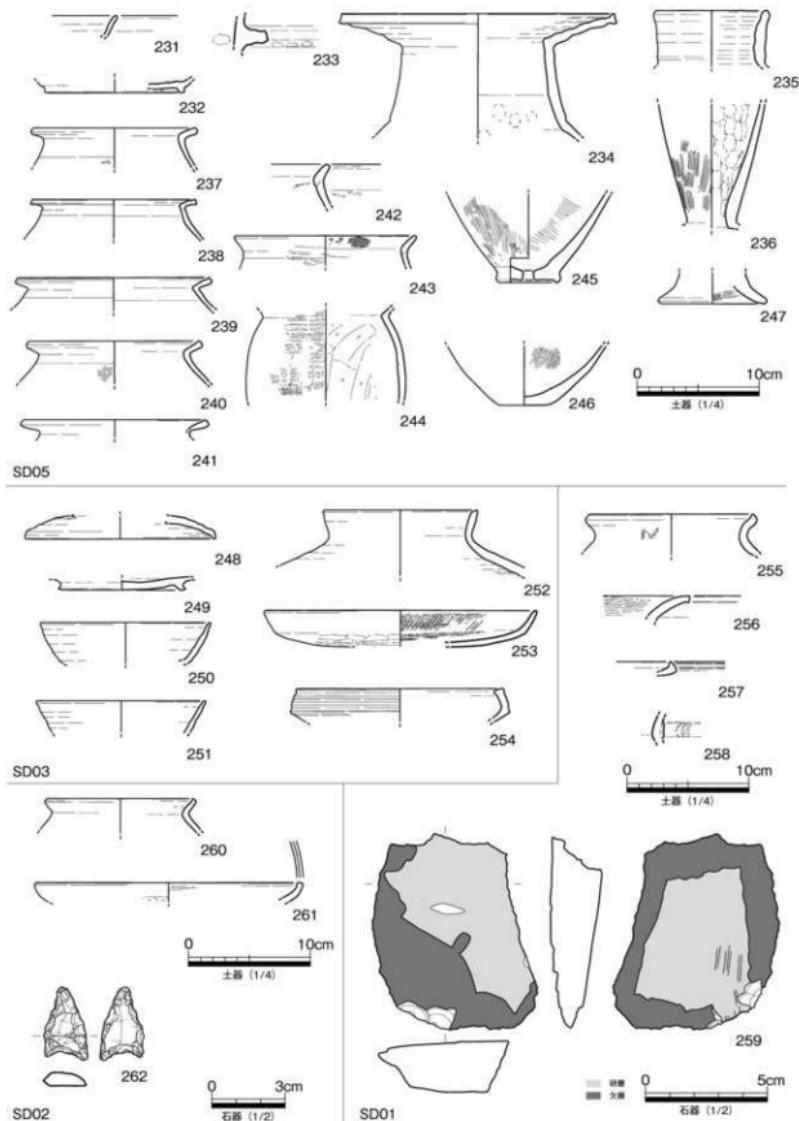
第34図 SD01b層 出土遺物9

SD05b 層では中位に遺物が集中して出土し、この層より上位を b-1 層、下位を b-2 層として遺物の取り上げを行ったが、明瞭な時期差は認められないため、ここでは一括して報告する。

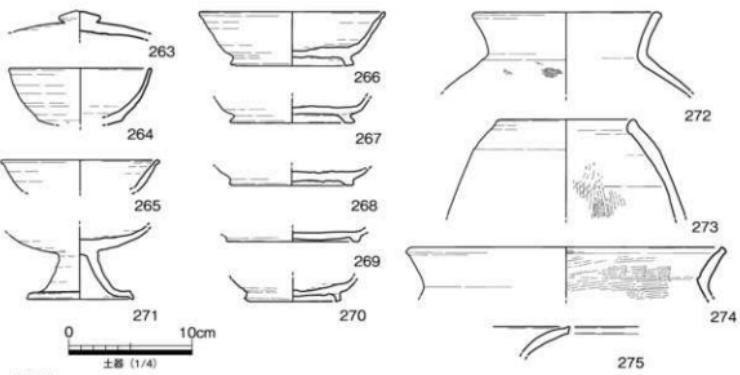
SD05 38 は弥生時代中期後葉の壺で、口縁端部に 2 条の凹線文が施される。39 は壺の口縁部か。40 ~ 53 は香東川下流域産の長頸壺・広口壺である。口頭部境の屈曲がやや緩く、頭部外面に竹管文 2 個が施される。40 は後期中葉でも古い段階に位置付けられる。54 は、厚手のつくりで外面にヘラミガキと粗いハケが施される。胎土はやや赤みを帯びた褐色で細かな黒雲母を含有する。高松平野ではほとんど例を見ない。口縁部・頭部を欠くが、広口壺だろう。にぶい橙色を呈する壺 55 は磨滅が著しく、大粒の結晶片岩を胎土中に含む。吉野川流域産(徳島県)とみられる。香東川下流域産の二重口縁壺 56 の胎土に含まれる角閃石・黒雲母は非常に細かい。57 は香東川下流域産の直口壺、58 ~ 60 は香東川下流域産の大型広口壺である。60 は調整に数種類のハケが用いられ、外面底部付近に横方向の分割ヘラミガキ、上半部に粗い横方向のヘラミガキが施されている。小~中型品とは調整手法が異なる。



第35図 SD02・03・04・07・18・19・108b層 出土遺物

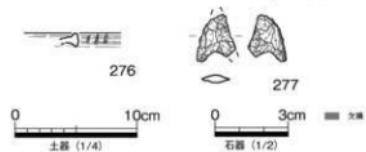


第36図 SD01・02・03・05a層 出土遺物

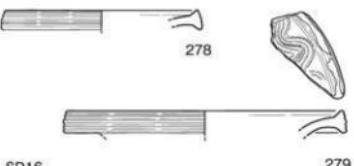


SD07

第37図 SD07a層 出土遺物



SD06



SD16

第38図 SD06・16 出土遺物

胎土の甕で角閃石をほとんど含まない。149は灰白色を呈する。154～158は香東川下流域産の大型鉢である。159は微細な角閃石と黒雲母を含み、香東川下流域産の胎土に類似するが、形状は異なる。褐色を呈する160は胎土に黒雲母を多く含み、内外面ともに粗いハケの調整が目立つ。161～163は弥生時代中期後葉の高杯で、161と同様のタイプは紫雲出山遺跡など丸龜平野以西に目立つ。164～171は香東川下流域産の高杯、172は同じく香東川下流域産の鉢である。173～177の鉢は褐色の胎土で含有する砂粒は比較的粗い。178は細かな角閃石や黒雲母を含む精緻な胎土で、外面には丁寧なヘラミガキが施される。台付鉢か。鉢口縁部と思われる179の胎土は香東川下流域産に近い。180も香東川下流域産と同様の胎土をもつ。小片のため全体形は不明だが、大型鉢の可能性もある。181・182は台付鉢で、うち182は白色系土器である。183～185は香東川下流域産の製塙土器で185は183・184に比べてやや古い時期を示す。186・187は支脚で、やや粗い胎土の点で両者は共通する。

る。61・62は弥生時代中期後葉(中期III-2)の甕口縁部である。61は角閃石が目立つ胎土をもち、62は橙色を呈する。両者とも供獻器とは胎土が異なるようみえる。63～116は香東川下流域産の弥生土器甕で、おおむね後期中葉～後葉のものである。口縁端部が上方にのみ拡張する116は終末期以降に降る可能性がある。117～134の胎土は香東川下流域産に類似し、細かな角閃石を多く含む。135～147・150～153は空港跡地遺跡周辺産とみられる白色系の甕で、135～152はさほど外反しない短い口縁部をもつ。145・146は口頭部境が明瞭に屈曲し、口縁部が外に開くタイプ、147は口縁部が緩く外反するタイプである。148は褐色に近い

188・189は凝灰岩製の砥石で残存部分には使用痕が確認できる。190はサスカイト製の石庵丁である。

SD01 191・192・194は弥生時代中期中葉の壺、193は中期後葉の壺である。195・196は香東川下流域産の広口壺である。197の広口壺の外面は粗いハケとまばらなヘラミガキが施される。胴部上半部と底部は接合しないが、調整と胎土から同一個体と判断した。198の取っ手は壺の一部か。199は中期後葉(中期Ⅲ-2)の甕口縁部である。厚手で外面にタタキの痕跡が残る甕200は、多量の角閃石と黒雲母を含む胎土が香東川下流域産と類似する。202も胎土は香東川下流域産と同様だが、おそらく器形は異なるだろう。201は白色系土器と思われる甕口縁部である。203・204は甕底部片で、204には穿孔らしきものが認められる。205は香東川下流域産の高杯もしくは鉢の口縁部である。206は凝灰岩製の砥石片である。

SD18・19・03・07・02・04・108 207は弥生時代中期中葉の壺、208は中期後葉(中期Ⅲ-2)の甕である。209の胎土は香東川下流域産に類似する。210～212は弥生土器甕で、210は香東川下流域産である。白色系と思われる212の底部外面には植物の圧痕らしきものがある。213はサスカイト製石鎌である。214は胎土に角閃石と黒雲母を含み、外面に凹線文が施される。器種は不明である。215は弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-2)の甕口縁部である。216は弥生時代中期中葉の壺口縁部である。217は灰白色を呈し、ヨコナデが丁寧である。弥生土器の壺としたが、焼成不良の須恵器の可能性もあり、その場合はa層の混入であろう。218～220・222・223は香東川下流域産の弥生土器甕である。褐色の色調をもつ甕221は粗いハケによる調整が目立つ。224・225も香東川下流域産で、224は高杯、225は鉢である。226の紡錘車の胎土は白色系土器に類似する。227・229・230はサスカイト製石鎌である。228は甕底部片だろう。

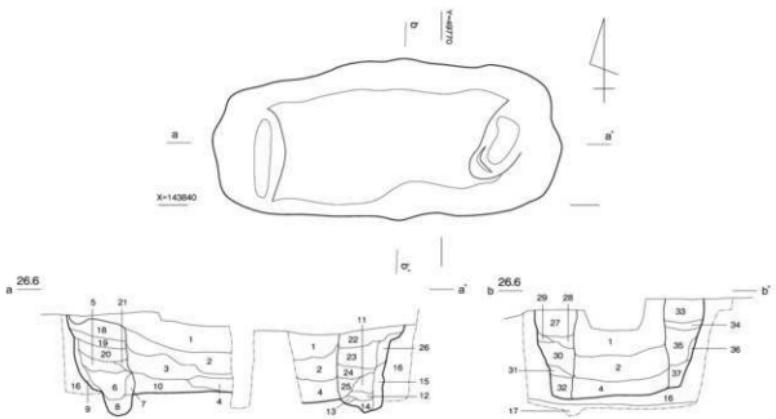
b層の時期 弥生時代後期中葉～後葉の土器がかなりの割合を占めており、56のように終末期に下る土器もある。よって、SD05b層の時期は弥生時代後期中葉～終末期としておきたい。

a層出土遺物 231・232は須恵器皿、233は土師器鍋である。234～247は弥生土器で、うち234・236・237～241は香東川下流域産、242～244は白色系である。236は後期初頭の弥生土器直口壺で、胎土には角閃石と黒雲母を多量に包含する。248～252は須恵器、253は土師器皿、254は中期後葉の弥生土器高杯である。須恵器甕255の頸部にはヘラ描で文様が描かれる。256は土師器甕、257・258は弥生土器である。安山岩製砥石259は、残存する2面に使用痕が認められる。260～262はSD02出土である。260は香東川下流域産の弥生土器甕である。土師器皿261の内面には横方向のヘラミガキが施される。262はサスカイト製石鎌である。263～272は須恵器、274・275は土師器である。273は焼成不良の須恵器と思われる。

a層の時期 出土した須恵器から8世紀前葉の埋没と判断できる。SD05出土233は時期が降るが、8世紀より新しい遺物は233のみであるため、233は区画溝を掘り込む遺構に伴うと考えたい。

SD06・16出土遺物 276は弥生土器壺口縁部片、277はサスカイト製石鎌である。278・279は弥生土器壺口縁部で、279の内面には波状文が施される。

SD06・16の時期 弥生時代中期後葉に位置づけられる。

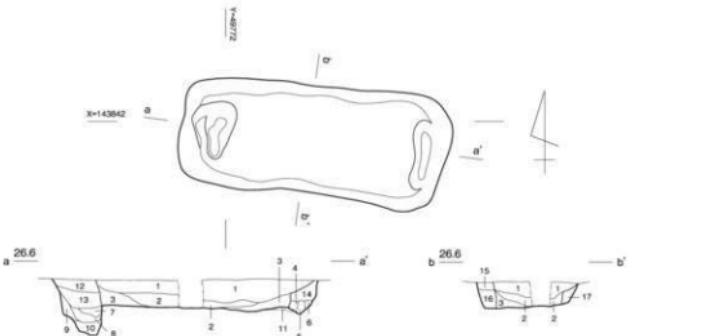


主体圖 1-1

- 1 2.5Y5/1 ~ 6/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [棺内出土]
- 2 2.5Y5/1 ~ 6/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [棺内出土]
- 3 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.6cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [棺内出土]
- 4 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [棺内出土]
- 5 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 6 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック、灰化土含む [真込め土]
- 7 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む
- 8 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 9 2.5Y5/3 に 3/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 黄褐色シルト [基礎層] ブロック含む [棺内出土]
- 10 2.5Y5/3 に 3/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 黄褐色シルト [基礎層] ブロック含む [棺内出土]
- 11 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 黄褐色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 12 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 黄褐色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 13 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 黄褐色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 14 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 15 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 16 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 17 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 18 2.5Y5/3 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 19 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 20 2.5Y5/4/1 淡黄色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]

- 21 2.5Y5/2 淡黄色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層]
- 22 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 23 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 24 NU 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 25 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 26 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 27 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 3.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 28 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 29 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 30 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 31 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 32 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 33 2.5Y5/2 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 34 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 35 NU 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 36 NA 灰色粘土質シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 37 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]

0 1m
(1/30)

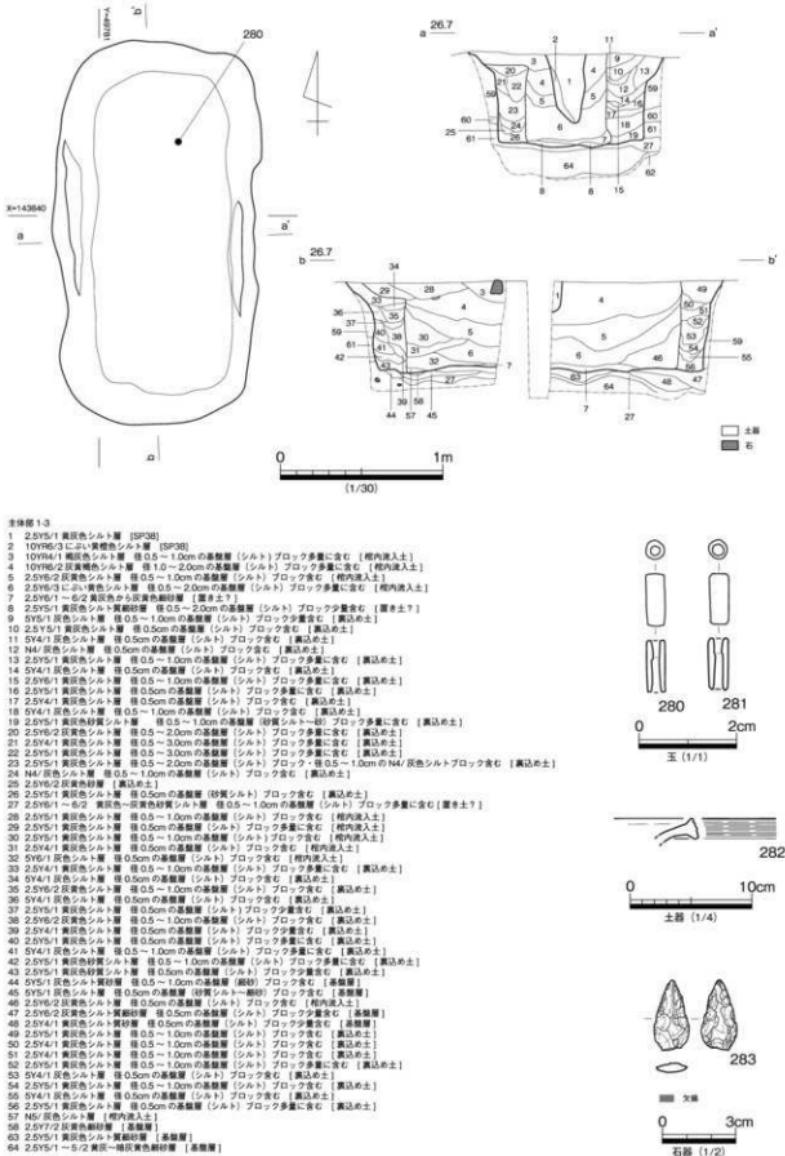


主体圖 1-2

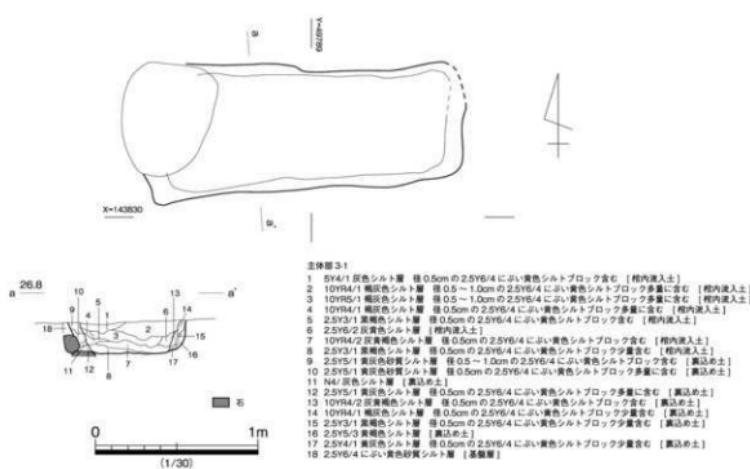
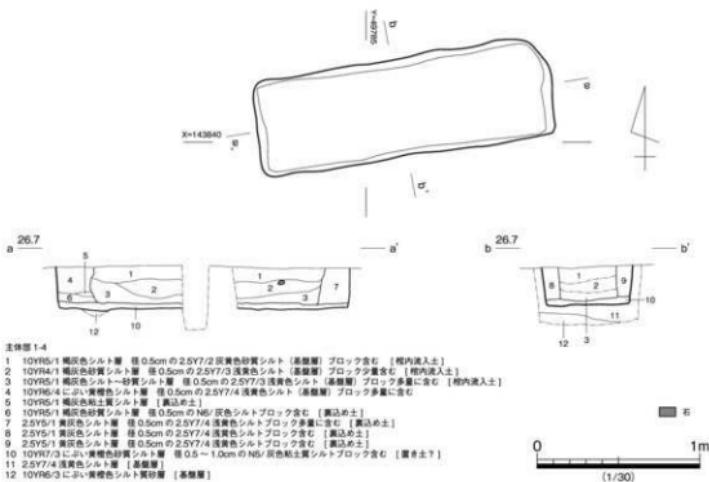
- 1 2.5Y4/1 ~ 5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 3.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [棺内出土]
- 2 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [棺内出土]
- 3 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 4 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] 差壓縮層 ブロック中心 [真込め土]
- 5 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 6 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 7 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 8 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 9 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 10 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 11 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 12 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 13 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]
- 14 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック含む [真込め土]
- 15 2.5Y4/1 黄褐色シルト層 厚 0.5cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 16 NU 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 1.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック少量化含む [真込め土]
- 17 2.5Y5/1 黄褐色シルト層 厚 0.5 ~ 2.0cm の 2.5Y7/4 淡黄色シルト [基礎層] ブロック多くに含む [真込め土]

0 1m
(1/30)

第39図 主体部 1-1・主体部 1-2 平・断面図



第40図 主体部1-3 平・断面図・出土遺物



第 41 図 主体部 1-4・主体部 3-1 平・断面図

7 主体部と出土遺物

区画墓1では4基、区画墓2～4では各1基の主体部が確認されている。区画内をある程度の面積で検出した区画墓2の主体部2-1は区画内部の中央にない。よって、区画墓2についても複数主体部を有していた可能性があり、それぞれの区画墓は複数主体部を基本とする可能性がある。主体部は木棺とみられるが、側板と小口板との組み合わせ方は明瞭ではない。側板・小口板ともに底部を掘り込んで設置されるもの(主体部2-1・4-1)、小口のみ底部が掘り込まれるもの(主体部1-1・1-2)、底部の掘り込みが認められないもの(主体部1-3・14・2-1・3-1)がある。また、主体部の掘りかたのサイズには幅がある。木棺の周囲を広く掘削されている(裏込め土が多い)主体部1-1・1-3・2-1は掘削深度も大きい。主軸方向は、主体部1-3のみ南北方向、それ以外の5基は東西方向である。

主体部1-1 区画墓1の東部、区画1-aのはば中央に位置し、長軸方向は東西方向で区画墓1のそれとはば一致する。掘りかたは長軸208m、短軸1.02mである。短軸の2辺では小口板の掘り込み痕が認められたため、主体部構造は木棺とみられる。東側の小口板痕の掘りかたはいびつだが、小口板は掘りかたの中で主軸方向と合うように設置されていたと考えたい。長側板の裏込土は確認できなかった。小口板の内法(長軸)は1.28mである。裏込め土から長側板の存在が推測され、その内法(短軸)は0.58mである。

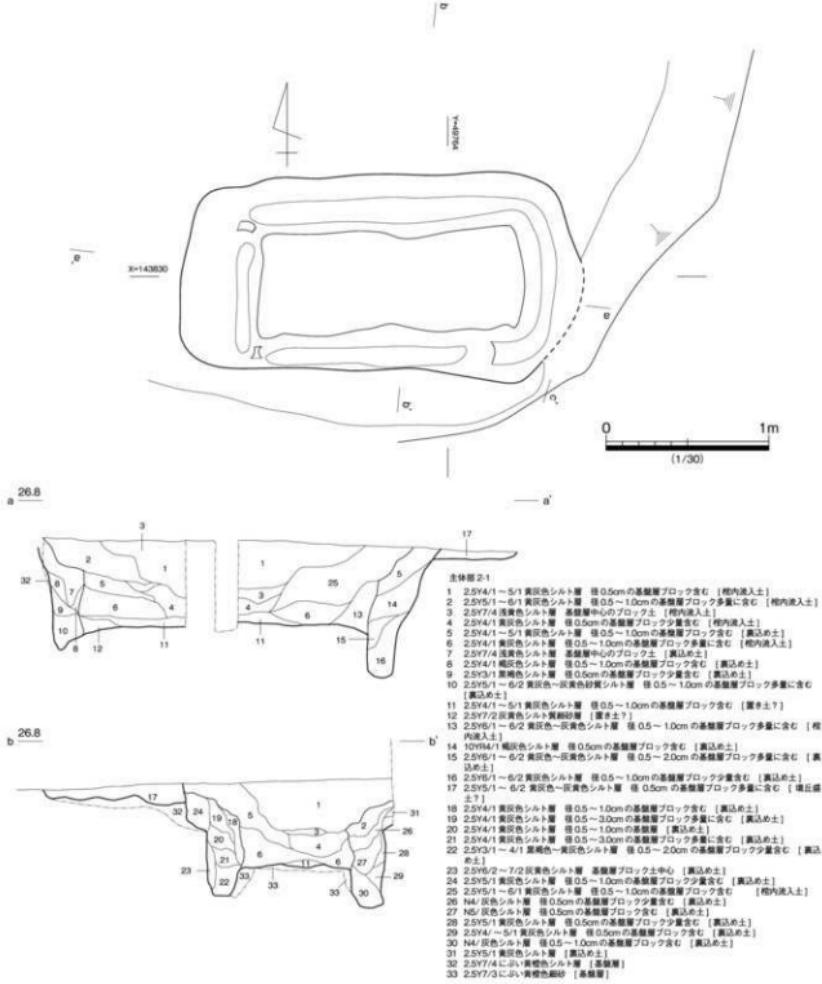
主体部1-2 主体部1-1の北東部、区画1-aの北東部に位置し、掘りかたは長軸1.62m、短軸0.62mである。小口板の掘り込み痕により主体部構造は木棺と判断できる。小口板の内法(長軸)は1.14mで、裏込め土から推測される長側板の内法(短軸)は0.4mである。

主体部1-3 区画墓1の東部、区画1-bの中央に位置する。検出された7基の主体部のうち、主体部1-3のみが長軸を南北方向に向ける。掘りかたの長軸は2.32m、短軸は1.2mである。断面で四辺の裏込め土が明瞭に確認できたため、主体部構造を木棺と判断した。棺痕跡の内法は長軸1.68m、短軸0.48mである。

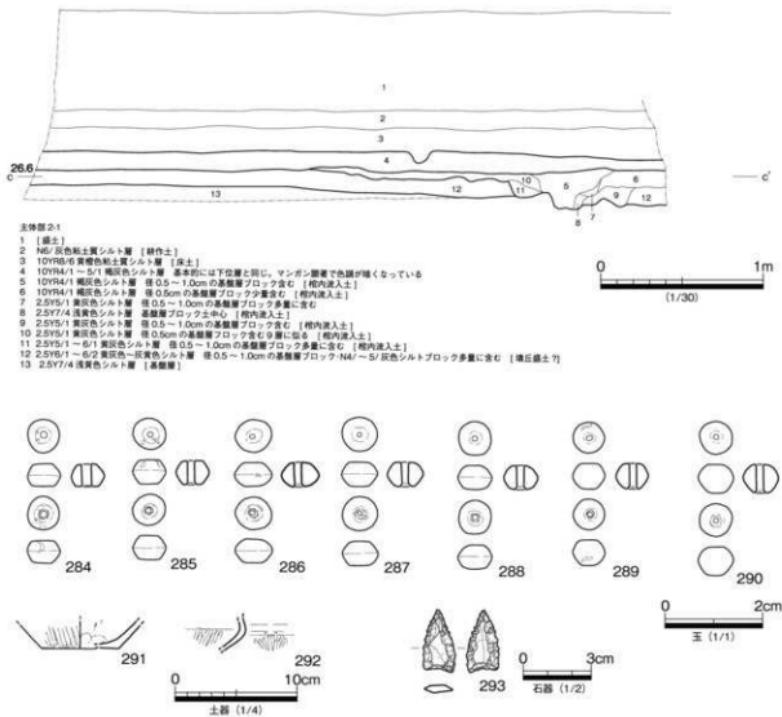
主体部1-3 出土遺物 280・281は緑色凝灰岩製管玉で、両端からの穿孔が認められる。色調は薄く、表面も風化している。280は北東部から出土し、281も主体部を「田」状に分割した北東部の堆積土中からの出土である。管玉を上半身への着装品とみれば埋葬頭位は北になる。282は弥生土器壺口縁部片、283はサスカイト製石鏡である。282・283は棺内流入土(埴丘盛土に由来か)に伴うものだろう。

主体部1-4 区画墓の東端、区画1-cに位置し、掘りかたは長軸1.80m、短軸0.56mである。微妙ながらも断面で裏込め土を確認したため、主体部構造は木棺とみた。棺痕跡の内法は長軸1.4m、短軸0.34mである。

主体部2-1 区画墓2の西端、区画2-cに位置し、南東隅の一部は調査地外に伸びる。掘りかたは長軸2.46m、短軸1.34mである。4辺で小口板、長側板の掘り込みを検出し、断面でも明瞭な裏込め土を確認した。棺痕跡の内法は長軸1.76m、短軸0.66mである。調査区東壁から主体部2-1南西隅に連続す



第42図 主体部 2-1 平・断面図

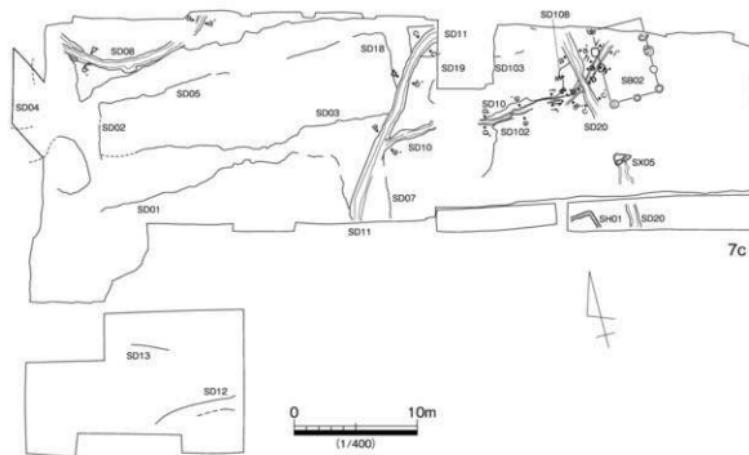
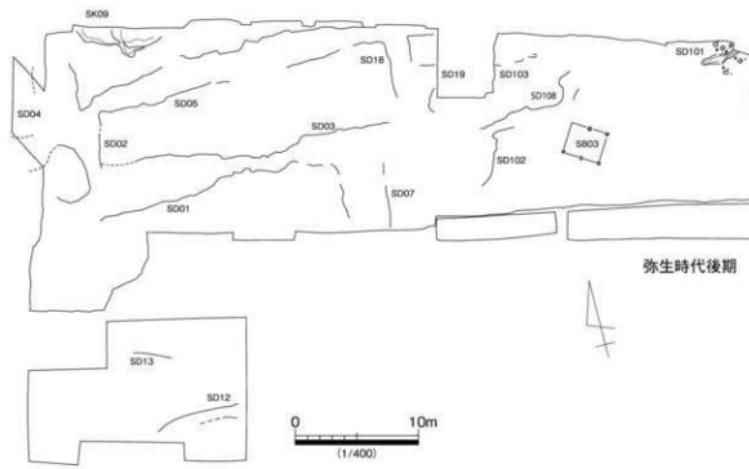


第43図 主体部2-1 断面図・出土遺物

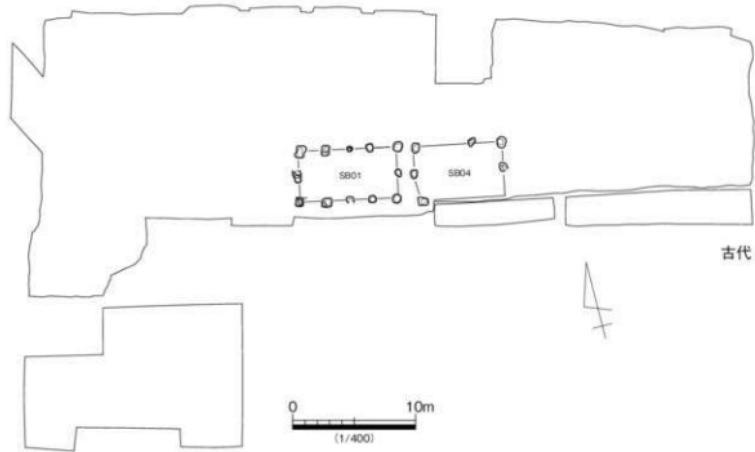
る断面では、塙丘と思われる土を掘り込んで主体部を構築、後に塙丘盛土が棺内に流入する状況が確認された。

主体部2-1出土遺物 284～290は水晶製算盤玉である。直径6.35～7.16mm、高さ4.46～5.84mmとほぼ同一サイズで、いずれも側面中位に緩い棱をもつ。7点ともに片側に円錐状の剥離痕「割れ円錐」が認められることから、石針による片側からの穿孔と考えられる。1点の出土位置は不明だが、6点は「田」状に分割した北東部から出土しており、算盤玉を上半身への着装品とすれば埋葬頭位は東になる。291は弥生土器壺底部小片、292は台付鉢小片、293はサスカイト製石礫である。291～293は塙丘盛土に由来する棺内流入土に伴うものだろう。

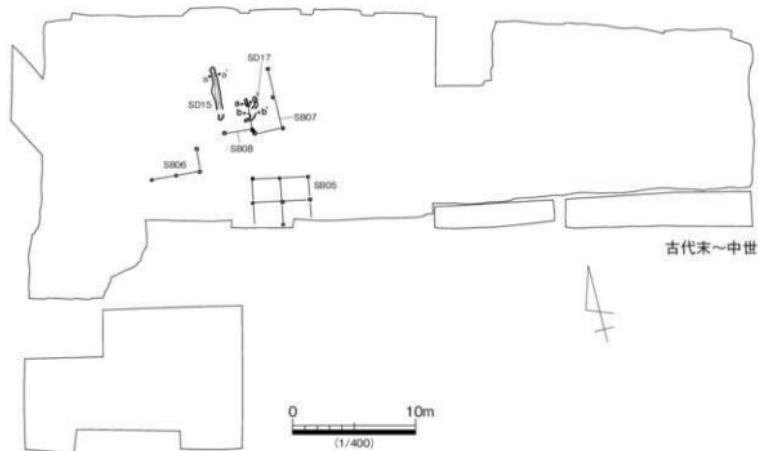
主体部3-1 2-4区東端、区画墓3に位置し、北西部を8世紀の掘立柱建物SB04の柱穴に破壊される。掘りかたは長軸2.08m、短軸1.04mである。短軸方向の断面で不明瞭ながらも裏込土と思われる堆積を確認したため、主体部構造を木棺と考えた。短軸方向の棺痕跡の内法は0.54mである。



第44図 時期別遺構配置略図 1



古代



古代末～中世

第45図 時期別遺構配置略図2

第4節 区画墓を除く弥生時代の遺構と遺物

1 据立柱建物

SB03（調査時遺構名：4次 SB03）

4-1区で検出した据立柱建物である。北西隅の柱穴が擾乱により壊されているが、SP123から西に伸びる柱穴を確認できなかったため、SP123を南西隅とする1間×2間の建物とした。この場合、梁間2.4m、桁行3.0mで面積は7.2m²になる。近隣にあるSB02とは柱穴の大きさや建物規模が異なるため、両者は異なる時期の建物の可能性もある。

遺物 SP124・125から香東川下流域産の弥生土器片が出土している。

時期 出土遺物から弥生時代後期後半とした。

2 土坑

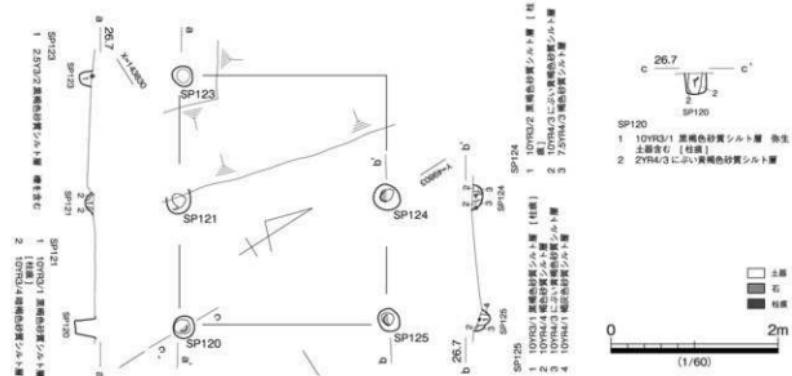
SK09（調査時遺構名：2次 SD09）

4区北西部で検出した平面形不定形の落ち込み状土坑である。底面の形状も細かな起伏があり、安定しない。北側が調査地外にあたり、全体形は不明である。

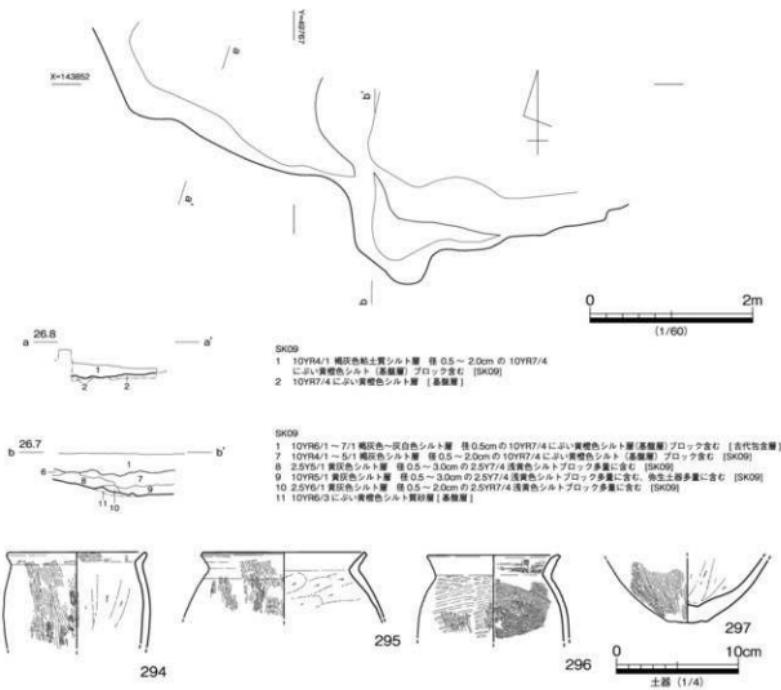
遺物 294～297は弥生土器甕で、294・296・297は褐色の胎土が共通する。295の胎土は橙色で粒径の大きな黒雲母の含有が顕著である。

時期 294～296から弥生時代後期後半と判断した。

3 溝



第46図 SB03 平・断面図



第47図 SK09 平・断面図・出土遺物

SD101（調査時遺構名：4次 SD01）

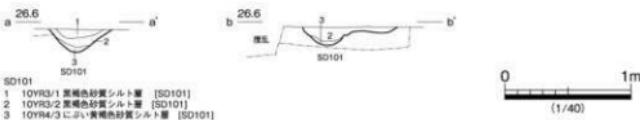
4-1 区北東部で検出した東西方向の浅い溝状遺構である。

遺物 弥生土器の小片が出土しており、うち数点は香東川下流域産の胎土をもつ。

時期 出土遺物からは弥生時代後半と判断できるが、古墳時代後期に降る可能性もある。

柱穴出土遺物

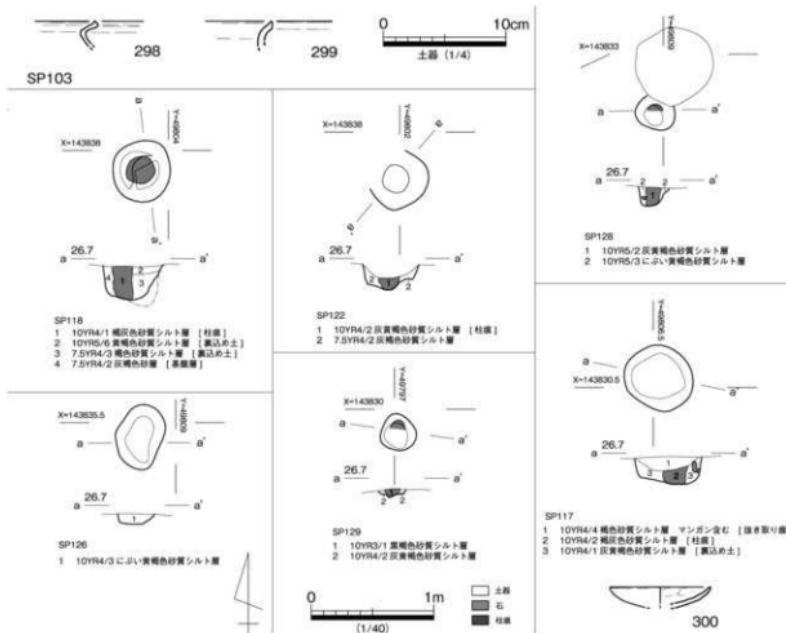
298・299はSP103出土の弥生土器甕で、298は香東川下流域産である。SP117に伴う弥生土器鉢300の胎土は香東川下流域産と類似する。



第48図 SD101 断面図



第49図 SD20 · 107 · 109 断面図



第50図 SP103 · 117 · 118 · 122 · 126 · 128 · 129 平・断面図・出土遺物

第5節 7世紀の遺構と遺物

竪穴建物

SH01 (調査時遺構名: 2次7区 SH01)

2-7区で検出したコーナーをもつ溝を平面形方形の竪穴建物の壁溝とした。この場合、柱穴 SP43 は主柱穴の候補となる。SP44 は建物の埋土上から掘り込まれており、SH01 とは別の遺構と判断した。

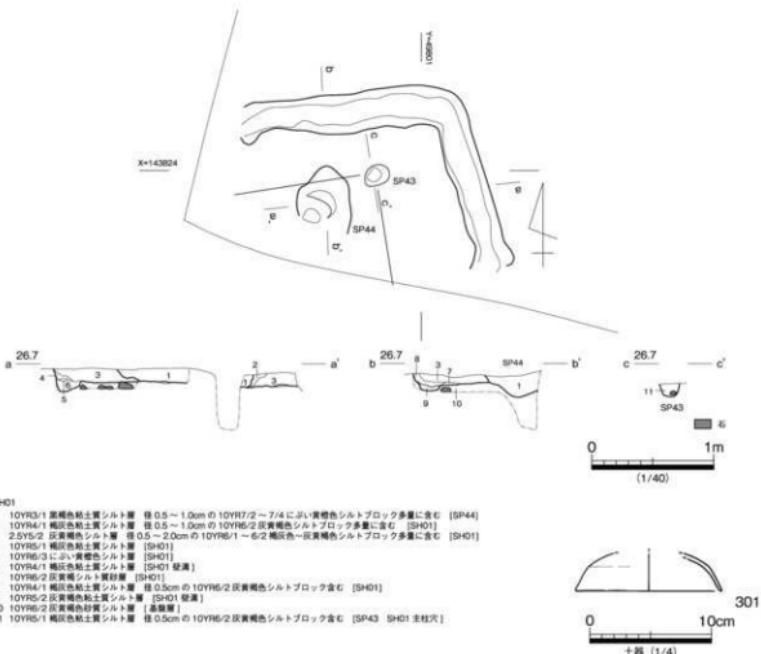
遺物 301 は須恵器杯蓋である。

時期 須恵器杯から7世紀中葉(様相2)と判断できる。

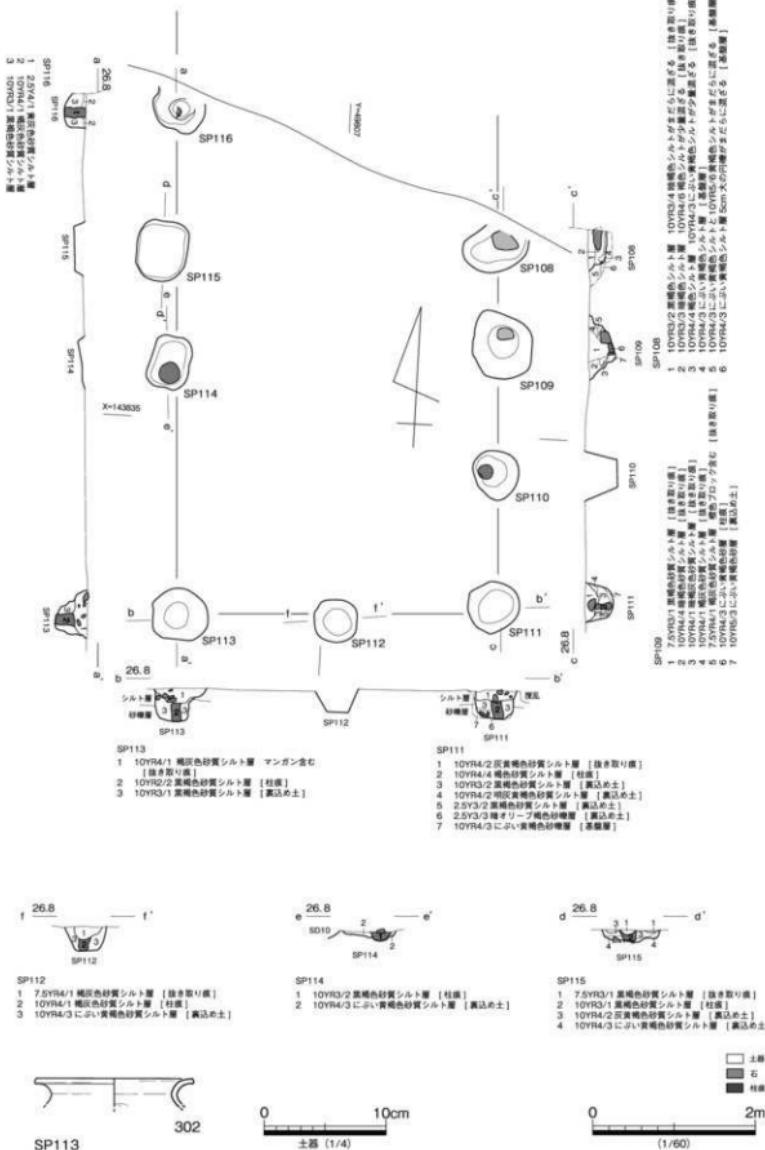
SB02 (調査時遺構名: 4次 SB01)

4-1区で検出した梁間 4.0m、桁行 6.2m 以上の掘立柱建物で、北辺は調査地外になるため全容は不明である。

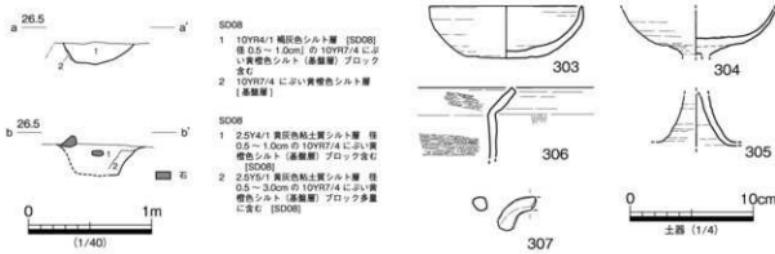
遺物 302 は柱穴 SP113 から出土した弥生土器甕である。図化はしていないが、柱穴 SP111 から須恵器甕の小片が出土している。



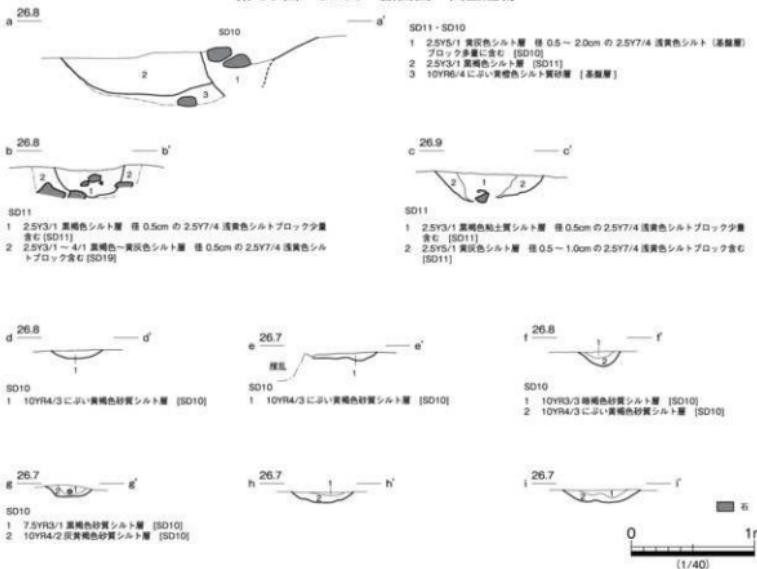
第51図 SH01 平・断面図・出土遺物



第52図 SB02 平・断面図・出土遺物



第53図 SD08 断面図・出土遺物



第54図 SD10・11 断面図・出土遺物

時期 302 は弥生時代後期後半、その他の小片も大半は弥生土器だが、SP111 から須恵器が出土していることから古墳時代後期の遺構と判断した。詳細な時期は不明だが、SD08 や SD10 などと同様の 7 世紀中葉（様相 2）と思われる。

溝

SD08（調査時遺構名：2 次 4 区 SD08）

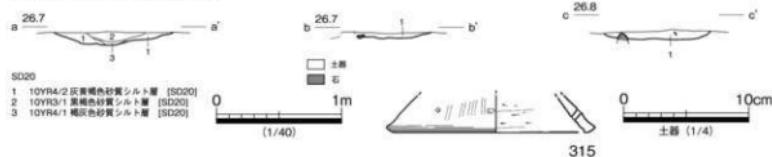
24 区で検出した、弧状を描く溝状遺構である。

遺物 303 は須恵器杯、304・305 は須恵器高杯、306 は土師器甕である。把手 307 は、弥生土器の壺肩部に接合するものか。

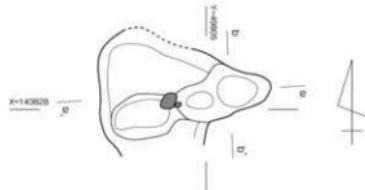
時期 303～305 から 7 世紀中葉（様相 2）と判断できる。307 は区画墓、またはそれ以前の遺構に伴うものであろう。

SD10・11（調査時遺構名：2 次 4 区 SD10・11、4 次 SD04・06）

23・24・41 区にまたがって検出した溝で、SD106 から SD10 が分岐し、SD10 は SD11 に合流する。高松平野の大局的な地形（北西から南東に向かって傾斜する）とは反対だが、底面レベルからは北東から南西への流下とみられる。区画墓の溝 SD03・07・18 の埋没途中に掘りこまれておらず、位置も区画溝におおむね一致する。SD10・11 は、窪地状になっている区画溝を利用して形成されたのだろう。また、SD10・11・106 が区画墓 1・2・3・6 の内側を通らないことから、区画墓の墳丘が盛り上がりとして残っていた可能性もある。



第 55 図 SD20 断面図・出土遺物



第 56 図 SX05 平・断面図・出土遺物

遺物 香東川下流域産弥生土器壺 308、サスカイト製石鏃 309 は SD10 から出土した。SD11 に伴う 310 は土師器壺である。311・312 は香東川下流域産の弥生土器壺、313 は弥生土器高杯、314 はサスカイト製石鏃である。

時期 310 と条里型地割に合致しない流路方向から SD11 は 6～7 世紀に位置づけられる。SD11 に後出する SD10 も近い時期であろう。SH01 や SD08 の存在を考慮すれば、両遺構と同時期の TK217 型式並行期だろうか。

SD20（調査時遺構名：2次 SD20、4次 SD05）

2-7 区から 4-1 にまたがる南北方向の溝で、区画墓 6 の区画溝 SD108、6～7 世紀の溝 SD10 埋没後に形成されている。

遺物 315 は香東川下流域産の弥生土器高杯である。

時期 SD10 に後出し、流路方向が条里型地割の方向と異なる点から、6～7 世紀の遺構と考えられる。

SX05（調査時遺構名：4次 SX05）

4-1 区南部で検出した遺構で、被熱が認められる。東部の突出する平面形も含めると、竪穴建物の竈と推測できる。

遺物 遺物は出土していない。

時期 SD20 に先行するため、6～7 世紀の遺構としてとらえたい。

第6節 古代以降の遺構と遺物

掘立柱建物

SB01（調査時遺構名：2次 SB01）

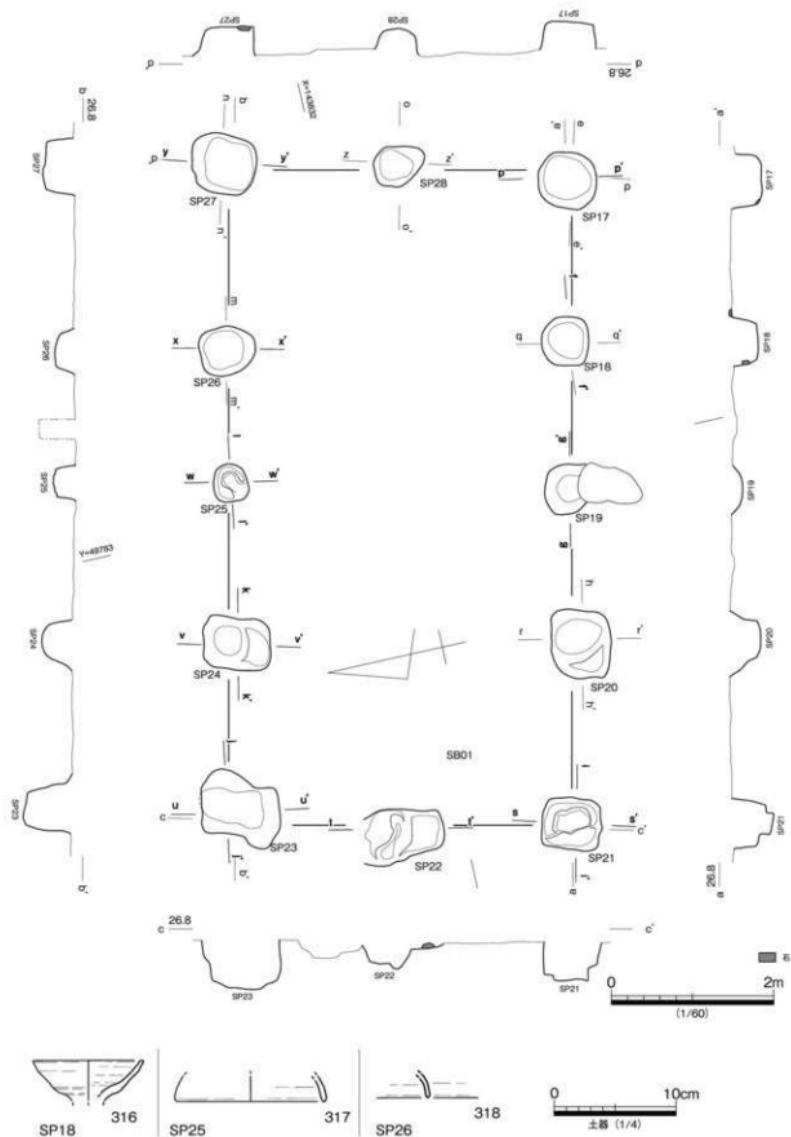
2-3 区で検出した 4.2m × 8.0m、2間 × 4間の掘立柱建物で、主軸方位は周辺の条里型地割に合致する。梁間 4.2m、桁行 8.0m で床面積は 33.6m² になる。区画墓の溝や古墳時代後期の SD10 埋没後に掘りこまれている。東に隣接する掘立柱建物 SB05 と北辺、南辺がほぼそろう。

遺物 316 は須恵器はそう、317・318 は須恵器杯蓋である。柱穴 SP18・25・26 から出土した。

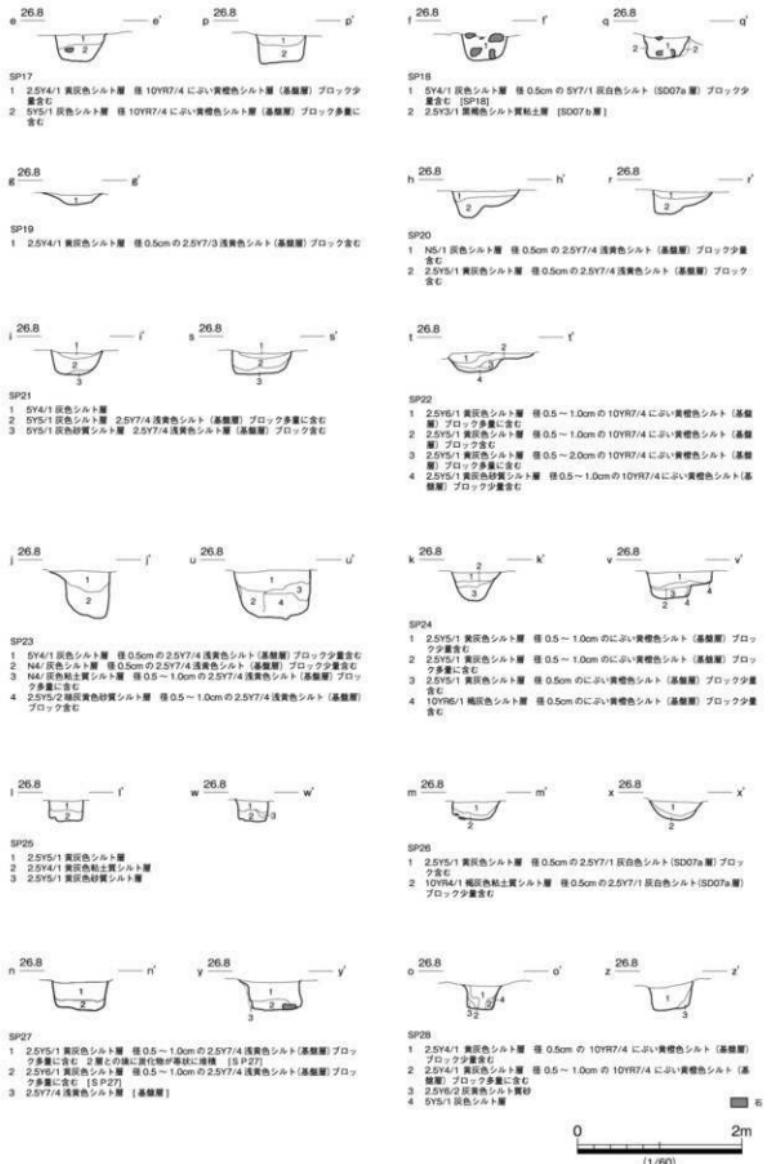
時期 柱穴から出土した須恵器は 7 世紀中葉～後半を示すが、区画溝最上層の a 層埋没（8 世紀前葉）以後に築かれているため、8 世紀以降と判断できる。区画溝埋没（埋め戻し？）の契機が、SB01 構築によるのであれば、限りなく 8 世紀前葉に近い時期となる。

SB04（調査時遺構名：4次 SB01）

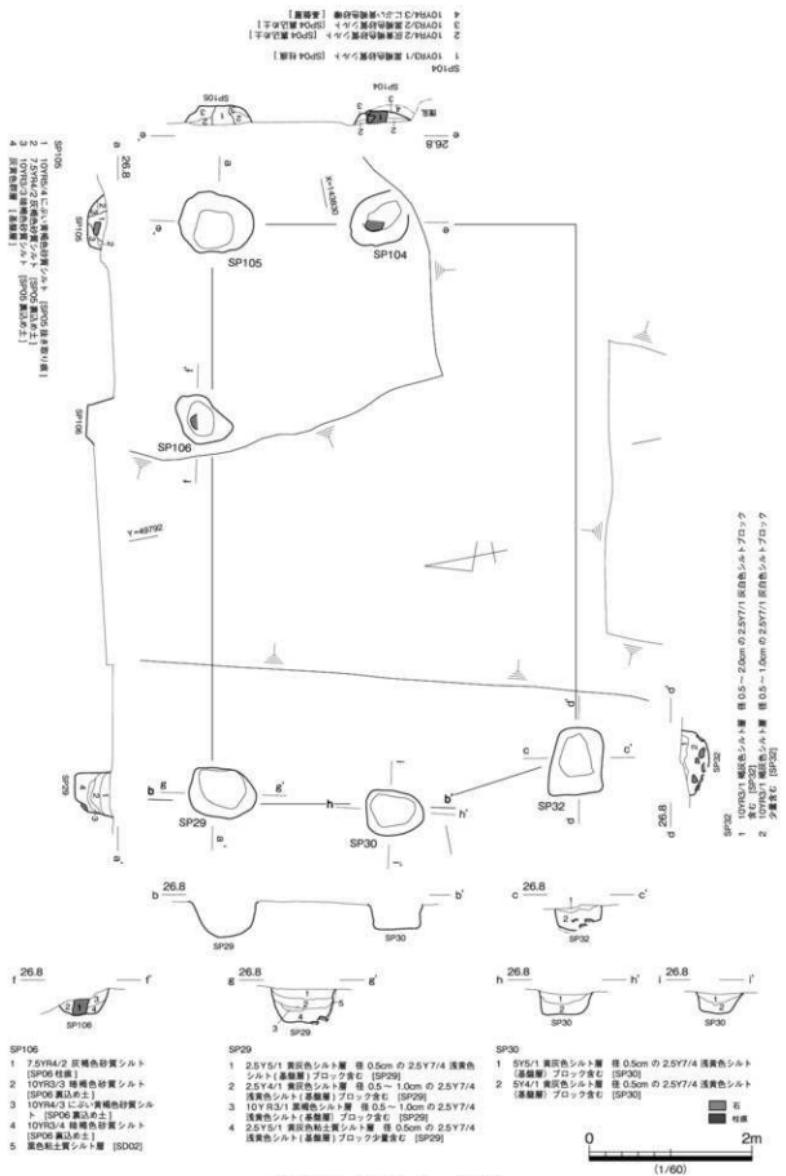
2-3 区から 4-1 区にかけて検出した掘立柱建物である。中央付近が搅乱で破壊されて全容が不明なうえ、SP29・30 の並びに対して SP30 の位置がややずれるが、SP105 が SP29 に対応する隅柱であることは確実なため、SP32 も含めて梁間 2 間の建物とした。柱間の間隔から桁行は 3 間となる蓋然性が高い。



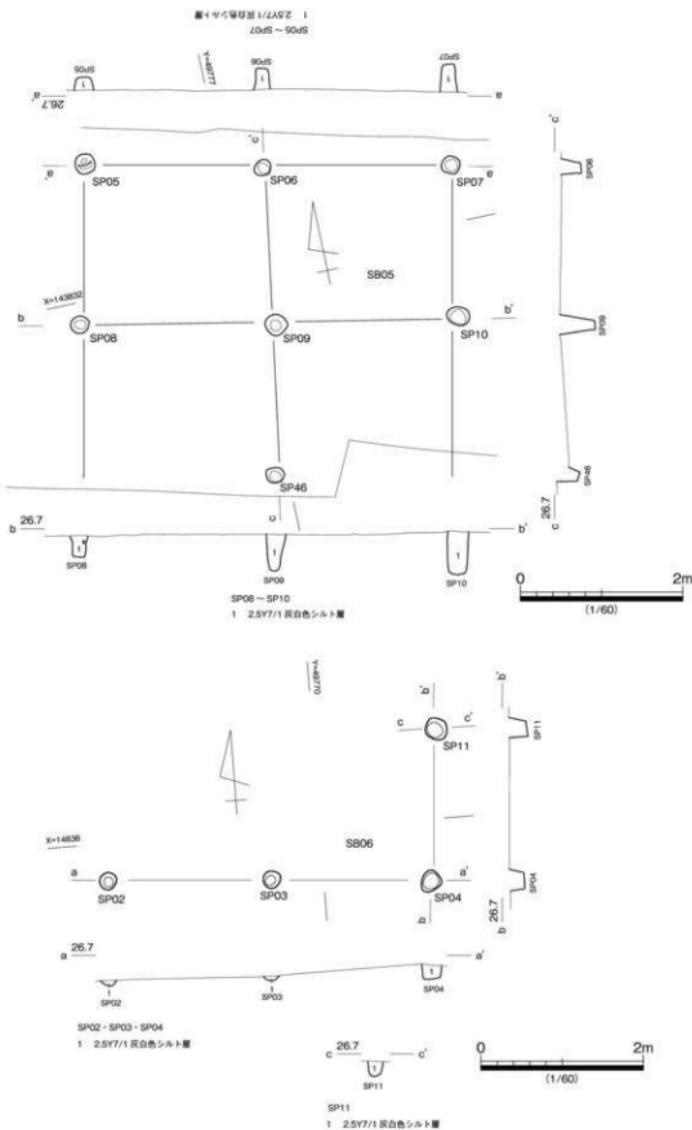
第57図 SB01 平・断面図・出土遺物



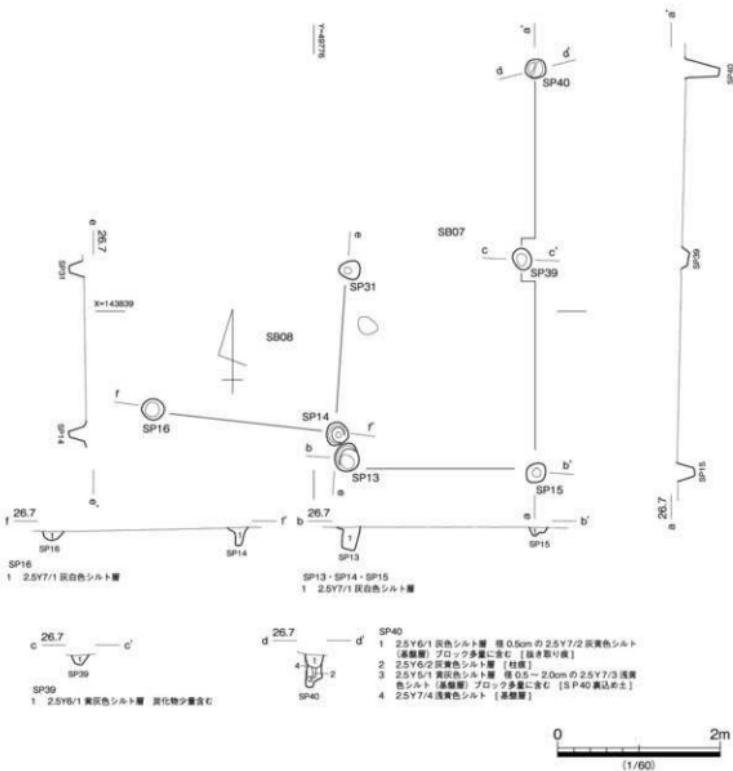
第58図 SB01 断面図



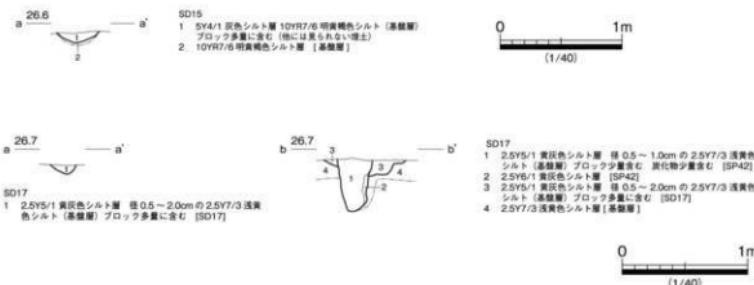
第59図 SB04 平・断面図



第60図 SB05・06 平・断面図



第61図 SB07・08 平・断面図



第62図 SD15・17 平・断面図

この場合、据立柱建物 SB01 と東西に並ぶ配置になる。

遺物 SP105 から須恵器甕小片、SP106 から土師器片が出土している。

時期 出土遺物と位置関係から SB01 と同時期、8世紀前葉と考えたい。

SB05・06・07・08

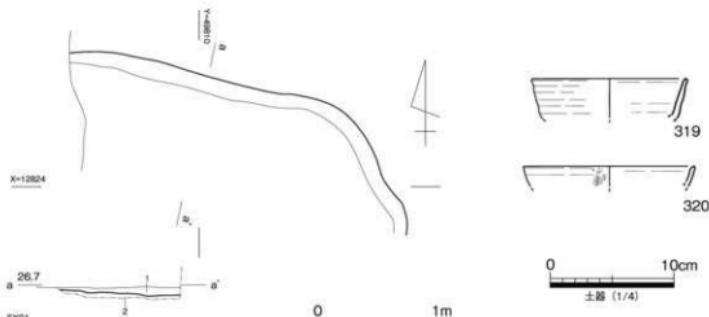
2-3区から2-4区にかけて検出した据立柱建物である。いずれも柱穴は小規模で、埋土は灰白色～黄灰色シルト層である。

遺物 遺物は出土していない。

時期 柱穴の規模と埋土から古代末～中世の建物と思われる。

SX01 (調査時構造名: 4次 SX01)

4-1区で検出した浅い落ち込み状の遺構で、擾乱による破壊で全体形は不明である。



第63図 SX01 平・断面図・出土遺物



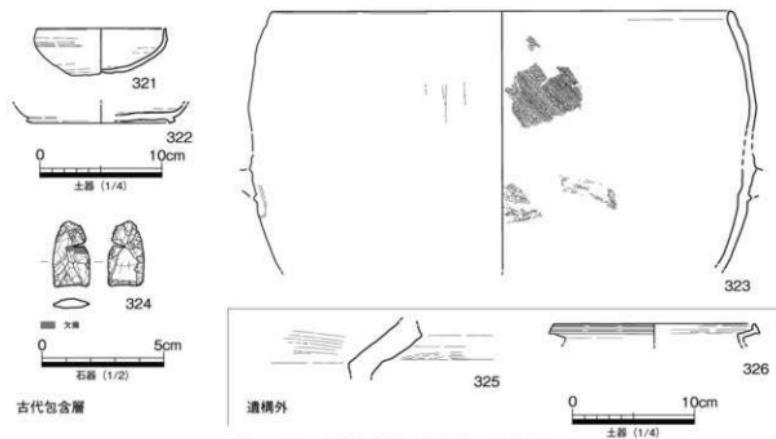
第64図 SX06 平・断面図



SP37
1 2.5Y4/1 黄褐色砂質シルト層 厚 0.5
~ 3.0cm の 塗多量に含む [SP37]
2 10YR5/2 黄褐色シルト層 [基盤層]



第65図 古代以降柱穴 断面図



第66図 古代包含層・遺構外 出土遺物

遺物 319・320は須恵器杯である。

時期 319・320から8世紀と考えられる。

溝

SD15 (調査時遺構名: 2次 SD15)

23区で検出した南北方向の溝で、条里型地割に方向が合致する。

遺物 遺物は出土していない。

時期 埋土と条里型地割に沿う方向から、古代末～中世の遺構と考えられる。

SD17

23・4区で検出した溝である。浅く、平面形が不定形で深いことから、削平され残った底部付近のみの遺構だろう。

遺物 遺物は出土していない。

時期 埋土から古代末～中世の遺構と思われる。

包含層出土遺物

23・4区の遺構検出面上面は淡い褐色の包含層が薄く覆っており、包含層中からは古代の遺物は少量出土している。321・322は須恵器杯、323は土師器瓶、324はサスカイト製石錠である。

遺構外出土遺物

325は土師器壺である。326は弥生時代中期後葉(中期Ⅲ-3)の壺口縁部片で、赤みを帯びた褐色の色調が区画墓群の供献土器によく似る。本来は供献土器であった可能性もある。